

大学教育における教授・学習過程と学生の 発達過程の関連（４）

「心理学文献講読」のゼミに対する学生の行動について

佐藤 公代

（教育心理学教室）

（平成15年10月23日受理）

The Teaching-Learning Process in University Education (4) Student's Behavior for the Seminar of Psychology

Kimiyo SATOU

（問題と目的）

佐藤（2001，2004a，b）は、学生の批判的思考力をみだし、教育心理のカリキュラム分析、卒論指導教官の決定要因分析を行ってきた。今回は、1回生の「心理学文献講読」のゼミに対して、学生はどんな行動をとるのかの分析を行って、授業改善や学生の意欲を高めるための基礎資料作りとする。「心理学文献講読」の授業評価については、すでに提出済みなので、そでご覧頂くとして、今回の資料は、学生自身の反省をこめての回答である。

仮説は次の通りである。

- （１）学生と教師の間にズレがみられるであろう。
- （２）そのズレを少なくするために、教育目標をほぼ一致しなければならないだろう。

（方 法）

- 1）対象者：心理専修生の1回生9名と、どうしてもこの授業に出席したいと言ってきた学生6名（教育学専修生3名，美術専修生1名，情報課程の学生2名）計15名。
- 2）手続き：筆者作成のアンケート用紙（名前は無記名とする）に記入してもらい、学生の反省の材料とする。

(結果と考察)

1. 出席について

「全部出席」と「1回休んだ」が5人(33%)ずつ、「2回休んだ」が4人(27%)、「3回休んだ」が1人(7%)である。理由は、「体調不良」「寝坊」「怪我」となっている。これを見る限り、真面目な学生が多い。ただ欲を言えば、心理専修生である限り、「全部出席」を望みたかった。

2. 遅刻について

「遅刻をしない」が7人(47%)、「毎回遅刻した」が3人(20%)、「1回遅刻した」と「3回遅刻した」が2人(13%)ずつ、「2回遅刻した」が1人(7%)である。理由は、「寝坊」「朝が苦手」「電車に乗り遅れ」「アルバイトから来るので」となっている。前期の月曜日1時限の授業であるが、高校の延長ということで、朝方のスタイルをとっているのかと思ったら、そうでもないことに気づかされた。

3. 質問用紙を決められた日時までに

「毎回提出した」は9人(65%)、「2回だけ提出した」と「3回だけ提出した」は2人(14%)ずつ、「1回だけ提出した」は1人(7%)である。理由は、「出し忘れた」である。前の週の金曜日までに提出することになっているので予習をしなければならず、きつい作業であるが、それでも、65%の学生はついてきている。

4. 予習について

「できるだけ自分で調べた」は10人(67%)、「調べていない」は5人(33%)である。調べた理由は、「理解するには必要だから」「今後のためになるから」「用語は自分でも調べられるから」「自分で調べないと力がかからないから」「面白そうだった」「当たり前だと思う」である。調べていない理由は、「読むだけでいっばいだった」「わからないところを探すことしかしていない」「何で調べたらよいかわからない」である。調べ方については、機会あるごとに言っていたつもりであるが、学生には内面化されなかったのだろう。難しい文献なので読むのに精一杯というのもわからないではない。ただ、もう少し、心理専修生の努力がほしかった。他専修生の1人は、一番真面目だった。

5. 予習時間について

「約1時間」と「約30分」が7人(47%)ずつ、「約2時間」が1人(6%)である。理由は、「一通り読んでわからないところを読み直していた」「あまり深く読んでいない」「約30分くらいが適当」である。量の問題よりも質の問題なのかも知れないが、質があまりよくないと思いき、量的に調べてみたが、やはり、ある程度の量がないと質的転換しないものであることがわかった。

6. 復習時間について

「復習をしない」は8人(53%),「約30分」は4人(27%),「約15分」は3人(20%)である。復習をしない理由は、「考えていなかった」「予習で精一杯だった」「どうするか考えあぐねていた」、約30分の理由は、「なまけた」「もう一度読み直していた」「これくらいが適当」、約15分の理由は、「ちょっと見直す程度」「日曜日に読んでいた」である。わからないところを自分なりに調べる勉強を、少なくとも心理専修生はしているのかと思ったらそうでもないことがわかり、内発的動機付けの問題に発展させるべきだろう。

7. テキストの内容について, 7章のうち

「どれも理解できていない」は4人(31%)「4つだけ」は3人(23%),「5つだけ」と「全部理解できた」は2人(15%)ずつ、「6つだけ」と「3つだけ」は1人(8%)ずつである。理由は、「中途半端だった」「理解しにくい章もある」「もっと読み込みが必要」「完全には理解できていない」の回答から、テキストの難しさがあるのかも知れない。4回生の卒論論文作成までに徐々にわかってもらえばよいので焦る必要はないだろう。全部理解できた理由は、「読めばわかるようになってきているから」である。テキストの読み込みが足りなくて質問している場合もあるので、今後、読み方にも研究のメスを入れることにしよう。

8. 理解の程度について

「理解できた」は7人(47%),「わからない」は5人(33%),「理解できない」は3人(20%)である。わからない理由は、「分野によって差がありすぎる」、理解できない理由は、「内容が少し難しい、予習、復習が足りない」「範囲が広くて、浅い理解のままだから」「時間をかけなかった」である。心理学一般の分野は広く、概論風に理解してもらってよかったのだが、完全主義をめざせば中途半端に感じるのもであろう。発達心理学、教育心理学、社会心理学、臨床心理学、生理心理学と幅広くやってもらい、その中から自分に興味のあるところをみつけてもらえばそれでいいのである。

9. レポーターとして

「やややれた」は10人(66%),「わからない」は3人(20%),「十分やれた」と「ややられていない」は1人(7%)ずつである。十分やれたの理由は、「教科書以外のこともレポートできたから」、やややれたの理由は、「レジメを作ればよかった」「もっとこまかく説明できたらよかった」「まだ頼りない部分もあった」である。ここでは、図表の説明を省略し、見ておいて下さいというレポートになってしまうので、筆者が説明するはめになってしまう。その点から言えば、やややれたと回答しても疑問が残る。ただ、昨年度までの学生よりは、勉強したと言える。なぜなら、今年は、一番きついやり方を学生に指示したからである。何とかついてきた分、大目にみてもよいだろう。

以上から、仮説(1)(2)は支持される。

(今後の課題)

- (1) テキストの読み方指導
- (2) 質問, 疑問のもたせ方
- (3) 外発的動機づけから内発的動機づけの仕方

(引用文献)

- 佐藤公代 内田伸子 2001 大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連 - 集中講義の授業評価による教授・学習過程の検討 - 愛媛大学教育学部紀要 第1部 教育科学 第47巻 第2号 1 - 20
- 佐藤公代 酒井千尋 2004 大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連(2) - 教育心理の力リキュラムに関する検討 - 愛媛大学教育学部紀要 第1部 教育科学 第50巻 第2号 53 - 61
- 佐藤公代 2004 大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連(3) - 指導教官決定要因の検討 - 愛媛大学教育学部紀要 第1部 教育科学 第50巻 第2号 63 - 67